

人物紹介コーナー③

発想力と実行力で愛する横浜のまちづくり

横浜の歴史や文化に関心のある人なら、横浜シティガイド協会の嶋田昌子さんのお名前は聞いたことがあるでしょう。それほど、嶋田さんは横浜では、特にガイドの世界では有名な人です。今回は嶋田昌子さんの心の中の“思い”も含めた足跡をご紹介します。（聞き手・文 渡辺登志子）



嶋田昌子さん

現在の役職：「横浜シティガイド協会」理事、季刊誌「横濱」企画委員、
「ヨコハマ洋館探偵団」団長、「横浜山手アーカイブス」理事長。

受賞「横浜文化賞」地域活動部門（2012年）。

写真は、市電保存館にある森日出夫氏撮影の嶋田さんの写真。とても素敵なお顔なので使用させてもらいました。

嶋田昌子さんは、「まち歩きガイド」の元祖、横浜シティガイド協会を立ち上げた人であり、今日に至るまで、良い意味で強い影響力を持ち続けている。発想力に優れ、企画を立て、その実現のために果敢に行政やメディアといった外部との交渉を行ってきた。そうした外に現れているダイナミックな活躍とは対照的に、嶋田さんの根底にあるのは、女性であること、市民であること、市民が市民のために働くこと、との思いがあるという。

時代を先取りする発想を形にしようと推し進めていく過程においては、多くの軋轢もあったようだ。

大学勤務時代・学内保育所づくり

嶋田さんは昭和15（1940）年8月20日生まれ、実家は本牧間門で、現在も住んでいる。本牧の海が今のような都会の海（埋立てられて工場地帯になった）になる前、まだ普通の海だった頃が幼少期の原風景という。幼稚園から高校までは横浜、大学は東京の日本女子大学へ進んだ。卒業後、研究科（万葉集の研究）へ進み、その後、同大学の助手として働いた。

その当時、大学の女性職員のために学内に保育所をつくる運動をした。女性が仕事と子育てを両立するために保育所は絶対に必要と思ったからだ。自分が在職中には、その保育所はできなかったが、退職の翌年（1971年）、学内保育所が設立された。立派な大学教授となった当時の同僚からは、「あなたのおかげで研究を続けることができた。」と、とても感謝された。

結婚・子育て・PTA活動時代

助手時代に、自分は研究者には向いていない、仲間と一緒に活動したいタイプだと自覚した。博士号をめざす男性と結婚し、東京・神田川に架かる面影橋の近くに所帯を持った。そこから専業主婦としての10年間がはじまる。まだまだ、女性は、結婚したら、子供ができれば、主婦になるのが普通の社会通念と社会構造の時代である。

まもなく、横浜の洋光台へ転居した。子育てには真剣で、子供の成長過程から目を離すことはなかつ

た。子育て中は幼稚園の母の会、PTA が活動の場となった。子供は 3 人だから、この活動は長く続いた。

当時の横浜はまだ米軍に接收されていた地域が多くあり、税収が少なく財政難だったことから東京に比べて文化施設が乏しかった。大都市にも関わらず、市立図書館はたった一つ（野毛のみ）しかないことに驚いた。子どもに本を読ませたいが、図書館がない。じゃあ、どうしようかと考えた時に、横浜市が「家庭文庫*をつくれれば、本は貸します」という仕組みをつくったので、それに乗って地域の有志と家庭文庫をつくることに取り組んだ。

*家庭文庫とは、地域の母親などのグループが自宅や空き部屋を利用してつくる自主的なミニ図書館のこと。

家庭文庫「カンガルー文庫」から生涯学級「トベラ学級」まで

しかし、父親が体調を崩したことで、洋光台から本牧間門へ転居、実家の隣に住み始めた。本牧では家庭文庫「カンガルー文庫」をつくった。子供向けカンガルー文庫の延長で、仲間とともに大人向けの読書会をはじめ、熱心に取り組んだ。その時のメンバーたちは、「横浜に文化がないなら、自分たちでつくる。」という意気込みだった。

当時の PTA つながり、自分も通った二葉幼稚園、続いて間門小学校で、どちらも創立 50 周年（1978 年と 1979 年）の記念誌をつくることになった。これらを通じて、本牧の歴史を深く学ぶようになった。さらに、「生涯学級という制度があり、少し補助金が出るらしい」ということを知り、「次は生涯学級だ」と、また有志を募ってスタートさせた。名前は「トベラ学級」。泳げる海だった本牧にもあった「トベラ」という暖地の海岸に自生する植物の名前で、「昔を忘れない」という思いを込めた。

トベラ学級では、生きた本牧の歴史を学ぼうと考え、元漁師や海苔問屋など海に関係する仕事の人、郵便局長、名主などの地域の人たちから話を聞く講座を開催した。その内容を「海があったころの本牧」という冊子にまとめた。後に「本牧の歩み」という本も 3 人の仲間で作り刊行した。地域の人たちを先生にして学ぶというのは、今では珍しくはないが、当時は、先生はあくまで学校の先生であるべきとの常識だったので、行政にはかなりの違和感を持たれたようだ。

こうした活躍が目にとまったのか、社会教育指導員として働く機会を得ることになった。フルタイムに近い勤務となるので、トベラ学級を続けることはできなくなり、皆でお別れ遠足をして生涯学級「トベラ学級」は解散、活動にひと区切りをつけた。

洋館調査・マップづくりへ

社会教育指導員の仕事は、生涯学習の立ち上げの支援や指導をすること。指導員としてのスキルを上げるため、研修を受ける機会も多かった。「男女共同参画社会」が叫ばれるようになった時代で、当時の生涯学習の対象者は女性だった。この仕事をしているなかで女性史研究グループや各種女性団体と知り合う機会も多く有意義ではあったが、自分は人の活動の指導をするよりも、自分は自分の仲間と活動したいと思うようになっていった。

本牧のことを学んでいくうちに、本牧にも多数あった洋館を知ることになる。「洋館は面白い。どこにどれぐらいあるのか、歩いて調べてみよう。」と有志が集まって、徐々に山手まで足を延ばして調査し

て、昭和 57 年（1982）に洋館マップを完成させた。

それがベースとなり、1988 年「ヨコハマ洋館探偵団」を設立した。洋館探偵団のマップ作成が毎年の講座開催へと進んだ。講座を開催すると毎回参加者が大勢集まった（100 人規模）。これは、横浜の洋館に魅力があるからではあるが、講座の組み方がやはり嶋田流で横浜の歴史・文化を深く掘り下げた魅力ある内容だったからと思われる。

しがらみのない自由な横浜に「人とのつながり」も

嶋田さんは 3 代前から本牧在住だが、横浜には「三日住めばハマッコ」という有名な言葉がある。開港とともに各地から集まってきた人々が横浜の住民になり、その後も多くの人々が流入してきたから、古いしがらみはないのだ。かつて他県出身のある女性市議員が嶋田さんに言った、「横浜では楽に呼吸ができる」と。故郷に住んでいたら、あれは誰その娘だとか嫁だとか言われるから、議員になど絶対になることはなかった、と。それを聞いて、「やっぱり横浜はいいわ」と改めて思った。だが反面、「隣は何をする人ぞ」で、人とのつながりが希薄である。こよなく横浜を愛する嶋田さんとしては、これを何とかしたい、人と人がつながれる方法を求めている。学ぶ、学んだことを人に伝える、また学ぶ、また伝える、その循環過程で仲間づくりができないかと思った。この方法が生かせるのは、ガイド、横浜を案内する市民のガイドだ、との結論に至り、昭和 57 年から 3 年間勤めた社会教育指導員を辞めた後、ガイド団体づくりに専念するようになった。

横浜シティガイド協会の誕生、しかし仲間は心配していた

横浜シティガイド協会の誕生物語は、ページ内「元祖『まち歩きガイド』、NPO 法人横浜シティガイド協会」にある通りだが、行政の支援の下、初めての養成講座は始まったものの、当然ながら、ガイドをしてくださいというお客さんはまだ一人もいなかった。嶋田さんは、一人前のガイドにまで育てる 2 年の間に外部にどんどん宣伝して、顧客を募るぞ、と強く誓った。しかし、一緒に始めた仲間たちはひどく心配していた。「ガイドを頼んでくる人なんているのか・・・、やっていけるのかしら・・・」と。その後

の会の発展ぶりをみれば、その心配は杞憂に終わったことがわかる。



毎年行っている研修会でのフリートーク、テーマは“質の良いガイドを行うには”。嶋田さんも会員に交じって研修中。

ボランティアガイド 有償 vs 無償のバトル

今では当たり前のことが昔は当たり前ではなかった。当時は、“ボランティアとは無償でおこなうもの”というのが定説だった。有償といったところで、大きな額ではなく、現在でもシティガイド協会のガイド料は、参加者 1 グループ 5 名迄に対し、ガイド 1 名につき 2500 円だから、参加者 1 人 500 円程

度のことである。有償というこの発想は、サービスを受ける人が料金を支払い、サービス提供者はその対価を受け取ると考えることにある。ここには企業のように多額の利益を生む構造はない。「責任を持ってガイドします」といつでも言えるよう、ガイドのモチベーションを維持し、質を向上させるためにも有償である必要があるのだ。しかし、この有償 vs 無償の対立で会設立当時の大事な仲間の一人を失う結果となった。

当時、ボランティアガイドの全国大会（全国各地の約 200 団体、約 500 人が参加）においても、無償でやるべきだという声が大きかった。最初の大会の頃（1996 年）、立派なガイド用の法被（はっぴ）を着た参加団体の男性の一人が「**何でボランティアなのに有償なのか**」と声を荒げ、嶋田さんに迫った。嶋田さん：「素敵な法被をお召しですが、それはどうなさったのですか？」、男性：「これは役所が作ってくれたんだ」と得意げに答えた。嶋田さん：「でも役所がつくるというのは税金でしょ。税金からお金が回ると本人が払うのと・・・」。男性はそれを聞いた途端“フン”と忌々しそうな表情になった。それから数年間は、**有償を唱える横浜の嶋田をつるし上げろ**、と毎年やり玉に挙げられた。が、次第に様子が変わっていった。今ではほとんどのボランティアガイドは有償で行われるようになった。高齢社会になり財政が圧迫され、役所がお金を出さなくなったこともその理由であるが、市民活動も役所ベッタリではなく自立することを考えなければならない時代になった。

嶋田さんが関わった団体がすべて有償ということではない。世のため・地域のため、と真に利用者にも無償で行っているものが NPO 法人「**横浜山手アーカイブス**」である。内閣府 NPO ホームページには、「この法人は、横浜山手に関わるすべての人々及び地域住民に対して、横浜山手に関連する歴史文化情報の収集及び提供に関する事業を行い、横浜山手の歴史文化の継承に寄与することを目的とする。」とある。具体的には、「ディレクトリ」という日本在住の外国人人名録（1870～1942 年）をデータ化しインターネット上で公開している。手間もかかるし出費も多いが、誰もが、図書館に出かけて行って分厚い本をめくらずとも、「**BLIFF Archives**」というサイトに行けば、居ながらにして、貴重な情報を得られるようになっている。利用者側としては実に有難いサービスである。

トイレ掃除で行政の信頼を得る

数年前、横浜山手の西洋館 234 番館の管理運営がシティガイド協会に委託された。このなかには掃除も、当然トイレ掃除もあった。それを言った途端に男性会員から拒絶された。「それなら私がやる」と出向いて行った。そうしたら中区役所の課長と職員の方から、手伝ってあげるからと言われたのだ。嶋田さんはこのトイレ掃除の一件でなぜか行政からの信頼を得ることができた。その後はスムーズに事を運べるようになったそうだ。嶋田さんはこう思った。市民活動を展開し続けていくにはある種の粘り、根底には中途半端ではない進退をかけるみたいな、不屈の精神みたいなものがあってこそ信頼関係を築けるのではないかと。

ネットワークづくりで強くなる、一人一人は弱くても

意外にも、嶋田さんは「人間は一人一人は弱いもの、自分は怖がりな臆病だと心得ている」と言う。だが、仲間をつくって活動すれば大きな力となって、自分たちが住む地域や社会をより良く変えること

ができるという信念がある。それが形となったのが、横浜シティガイド協会であり、ヨコハマ洋館探偵団や横浜山手アーカイブスなどである。

設立にも深く関わったボランティアガイドの協議会（県と市の両方にある）の重要性についても、ガイド団体の一つひとつは多くは弱小団体にすぎない。だからこそ、ネットワークをつくり、知恵を出し合って活動を継続していく必要がある。そのためにも、運営において参加団体がけっして損することがないように仕組みづくりを考え、慎重に進めた。今でも協議会運営も団体同士の連携もうまくいって良い活動ができていそうだ。

また、市民団体の、会長、代表、理事長といった役職に対する考え方として、役職は、あくまで役割を遂行する団体責任者の名称に過ぎない。市民活動においては、常に一市民としての視点を忘れてはならないから、役職に就く人の入れ替わりは可能であるよう、風通しをよくしておくべきとしている。

魅力と刺激のある企画で横浜のまちづくりを

この数年は足腰の衰えは否めないと嶋田さんは言う。大病をし、転倒したこともあり、無理がきかなくなった。ガイドの仕事については、一緒に歩き回るガイドは止め、定点ガイド（案内すべき場所において、お客さんたちがそこへ移動してきたら、説明をする）をしている。

しかし、知恵の泉からは、これまでどおりアイデアが湧き上がってくるようだ。昨年1～3月は新型コロナウイルス感染恐怖で世の中が真っ暗になり、ガイド活動も全くなかった。その中で、自分には何ができるのかと考えた。ほとんどの事業が中止になったのだから、お金は余っているはずだと思い、電話をかけまくり、「何かうちでできることはないですか？」と売り込んだ。その中で得た仕事がランドマークタワー展望台のリニューアル（2020年6月）の際の横浜の歴史文化に関する展示づくりだった。

本年、2021年は持続化給付金を獲得、必要な支払にも充てたが、「インカム」という相互通信装置を購入した。これを使えば、ガイドの説明が離れていても聞こえる、参加者が密にならずに歩けるといいう、ガイド活動が安全に行える画期的な機器である。

また、コロナ禍の活動自粛で深い眠りについたままの会員の目を覚ますのも自分の役割だと思っている。大河ドラマや2024年からの新一万円札の顔となる話題の人『渋沢栄一』の企画展示を区役所とみなとみらい線に売り込んだので、近く、みなとみらい線に渋沢栄一が出現するらしい。

常に前向きで、果敢な挑戦者でありながら、怖がりな繊細な面を持つ嶋田さん、魅力と刺激のある企画で、これからも人を育て、地域を活気づかせ、さらに横浜の魅力を発信する活動を続けていきたいと思っています。